

傾斜空間 第六回公演

良の金神

作／田口浩一郎

陸軍の軍服を着た男が一人、下手より女の腕を掴んで登場する。女は携帯用の簡易金庫を胸に抱えている。男、舞台中央に、やや手荒く女を座らせる。

兵1 …。

女 …。

兵1 身分は。

女 …。

兵1 …もう一度聞く。身分は…。

女 …ありません。

兵1 ん？

女 語るほどの身分など…ごさいません。

兵1 (皮肉さと武官らしい無骨さがなймаぜになった態度で)…冗談は困ります。

女 …。

兵1 語るべき身分もない方がどうして宮城におられましようや。

女 …。

兵1 …さあ、手荒なことはしたくありません。仰られるが身の為です。

兵1 で、その下っ端女官がなんだってこの非常時にあんなところをウロチョロしていた。

女 いけませんか？

兵1 なに？

女 女官が女官の事務官室に参ったのです。なんの不都合がございます。

兵1 これはお気の強い……では、その事務官室の様子はご覧になったでしょう。

女 ……

兵1 灯火管制下の暗闇で、しかもこの建物の複雑さ……正直我々もどの部屋が事務官室でどの部屋が御座所だか見当もつかんのですよ。そこで手当たり次第引っ掻き回させていただきました。

女 ……

兵1 御所不案内な我々にこの状況下……レコード盤一枚捜せ……そりゃ土台無理な話で。

女 ……

兵1 小官は疲れ、苛立ち、暗闇のなか搜索班から一人はぐれ……我が朋輩ともがらによって荒らさ

れつくした部屋をよぎりました。すると、中より出うちは見目麗いずるしき女官にようかん殿ではありま
せんか。

女
…。

兵1 しかも後生大事またまでに真玉手抱またまでくは…貧乏臭い簡易金庫…。

女
…。

兵1 …殿上人が火事場泥棒ですか。

女
…。

兵1 それとも何か大事なものでもその中に？

女
…。

兵1 誰のお言いつけです？中には何が？

女
…。

兵1 渡せ。

女 …いやです。

兵1 渡せ！

兵1、無理やり奪おうとする。女、必死に抵抗する。

兵1 …(軍刀を引き抜く)

女 …!

兵1 軍命だ。

女 …御所で狼藉に及ぶ気ですか!

兵1 神州不滅、聖戦完遂の大義がため。

女 終戦の大詔は下ったのですよ。恐れ多くも陛下の大御心に添わない大義などありませんか。

兵1 俺は聞いておらん。

兵1、女ににじり寄る。すると兵1の背後から声がかかる。

兵2 おい、何やつてる。

兵1、振り返る。女、その隙に逃げようとするがスカートを踏まれる。

兵1 おう。ご苦労。

兵2 ご苦労ではない。何やってる。

兵1 怪しい女官を一人取り押さえた。

兵2 ほう。

兵1 この金庫を抱えて逃げようとしおつたから今あつた検めている。

兵2 ……そうか。しかし何も段比良だんびら抜く必要はあるまいに。

兵1 今抜かなくて何時いつ抜くか。

兵2 米兵がやってきたらぶつた切ればよからう。日本人に使うこともあるまい。

兵1 いい日本人と悪い日本人がおる。

兵2 ほう、この別嬪べっぴんは悪党かね。

兵1 見た目じゃわからん。特に女はな。

兵2 なるほど。

兵1 君側の奸を除くも我らの使命よ。違うか。

兵2 …。

兵1 さあ、その金庫をこちらへ。

女 …。

兵2 (女に)この男は言い出したら引つ込めません…言う通りにしたほうが利口なのでありますまいか？

女、首を振る。

兵1 貴様！

兵2 因みにコイツの刀は官給品のナマクラです。斬られても一発では死ねませんからな。

苦しみますよ。

女 …。

兵1 余計なことを言うな！

兵2 お前は政治を知らんなあ。

兵1 なに！

兵2 押してばかりじゃ交渉は進まん。ときにはある種の諧謔かいぎやくを交えてだな…。

兵1 交渉だと？命令だ！

兵2 ふん、幼年学校出のカチカチが…。

兵1 何だと！

兵1が兵2に向き直っている間に、女、そうつと逃げ出そうとする。兵2、懐からピストルを出して女に向ける。

兵2 待て。

女、動きを止める。

兵2 ここであなたを見逃すわけには参りません。その金庫はお渡し願ひしましょう。

女 …。

兵1 …。

女 あなた方は…恥ずかしくないのですか？

兵2 は？

女 あなた方は近衛兵でしょう。近衛兵の職責は何です？

兵2 宮城の警備と天子様の警護ですが。

女 ではこの体たらく、どういうことです。

兵2 というと？

女 禁裏に踏み込み、荒らしまわる。官吏を捕えて恫喝する。

兵2 命令を遂行したまです。

女 その命令は禁裏を侵すほどのものですか。

兵2 仔細は存じませんが…。

兵1 皇国の行く末を左右する作戦である！

兵2 …。

兵1 …とだけ命じられておる。

兵2 そういうことです。

女 ではあなた方は、お上の聖域を侵すような命令を、その意味も良くわからずに実行

しているということですね。

兵2 軍命なれば、我々には問い返す権限などありません。

女 その軍は誰のものですか？ 恐れ多くも陛下のものではありませんか。皇国の行く末は陛下がお決めになることです。その命令は誰の出したものです？

兵2 師団命令です。

女 …ふん。(女、鼻で笑う)

兵2 ?

女 ご存じないようですから教えて差し上げましょう。昨日、御前会議におきまして、陛下は終戦に至るやむなしのご決意を表明されました。

兵1 …。

女 あなた方にはまだ通達されておらぬかも知れませんが、翌日正午にも帝国陸海軍全ての司令部に戦闘停止命令が発せられるはずですよ。

兵2 …。

女 あなた方は陛下のご命令と師団命令、どちらを優先するのですか。

兵2 それは…。

女 さあ、分かったら私をお放しなさい。謀反人になりたいのですか。

兵2 しかし…。

兵1 恐れ多くもおお！（軍靴を合わせる）

兵2 …。

女 …。

兵1 小官は兵学校に於てえ…上官の命令はあ、天皇陛下の言葉と思えという、教育を受けてまいりましたあ。

女 …。

兵1 …すなわち、私が受ける陛下の命令とは、陛下が我が上官を通して語られる言葉である。然るに…たかが一介の女官が語る言葉を、どうして陛下の言葉と信じる事ができようか。

女 …。

兵2 だそうです。

女 …。

兵1 女官の…しかも雑仕ふぜいの言葉が俺の信念を動かせると思ったら大間違いだ。分かったら、さっさとその金庫を渡せ、そして軍に協力しろ。言いたいことは警備司令部

でゆつくりと聞いてやる。

女 …… 憐れな。

兵1 何！

女 間もなく米軍が上陸するはずです。

兵1 ふん、望むところよ。

女 軍上層部はすでに終戦の詔みことりに同意しています。ですから、本土決戦はありません。

軍は例外なく武装解除されます。そうなれば、あなた方は何の力も持たなくなるのですよ。

兵1 黙れ！

兵1、再び軍刀を突きつける。女、微動だにせず見返す。

女 この宮中において……私わたくしどもが知らないことは何ひとつことごとくありません。

兵2 ……。

女 私ども女官は……帝のお傍そばに侍し、重臣の方々とも頻しげく交わりがございますゆ

え。……私をお信じになるも……また、ならぬもそちら様のご勝手ですが、このまま私に無礼を働き続ければ後々まで謀反人の謗そしりを受けることになりましょう。

兵1 戯言を。

女 戯言かどうかはすぐにわかります。

兵1 斬る。

兵1、軍刀を構える。兵2、それを制する。

兵2 その金庫をお見せなさい。

女 ……。

兵2 事の真偽は分かりません。或いはあなたの言うことが正しいのかもしれない。

兵1 どけ。斬る。

兵2 五月蠅うるさい。…だが、それは我々末端の兵卒には何の意味もないことです。兵はつまる

ところ自分の上官に従う存在で、それ以上でもそれ以下でもないからです。

女 …。

兵2 我々が受けた命令は陛下の廷臣を捕えることでもなく…殺すことでもなく(兵1を
にらむ)

兵2、手を差し出す。女官、金庫を後ろ手に隠す。

兵2 我々が受けた命令はひとつ。レコード盤を一枚見つけ出すことです。

女 …レコード盤。

兵2 はい、貴重な品だと賜っています。

女 …。

兵2 どうかその金庫をお見せください。中から聖徳太子の札束が出てきたら、我々も笑
つてあなたを見逃すことができます。

女 …。

兵2 ご協力願えませんか？

女 …。

兵1 どけ、まどろっこしい。この逆賊を切り捨ててあつた検めればよろしい。

兵2 どうしてお前はそうなんだ！

兵1 非常時ゆえよ。

兵2 雑仕でも陛下の近侍。斬つたらお咎めは免れん。

兵1 お咎め覚悟。これも勤めと心得る。

女 …レコード盤を見つけて…それをどうするお積りですか。

兵1 知れたこと、連隊長にお渡しする。

女 そのレコード盤が何なのか、分かっているのですか？

兵1 知らず。が、察している。

女 …。

兵2 否、いや自明だな。ここに踏み込んだ誰も知っているさ。

女 では、お帰りなさい。

兵1 何？

女 あなた方が捜しているものが何かぐらい存じ上げていますわ。

兵1 ……。

女 ……仮に、ここにそのレコード盤があるとしましょう。(女、金庫を振る)だとして、それに手をかけるは臣下として大逆であり…。

兵2 ……。

女 また翻ひるがえつて、この中身が件くだんのレコードでないとすると…あなた方は、私になんの用もないということになります。

兵1 ……。

女 目を覚まさない。そして近衛兵の任務が何なのかよく考えてみなさい。

兵1 近衛兵の任務は…。

女 ……。

兵1 陛下をお護りすること。

兵1と女、しばし睨み合う。

女 ……解っていただけでうれしいですわ。では、これにてお互い……。

兵1 (語気強く)陛下を……。

女 ……。

兵1 ひいては日本の国の在り様あをお護りようすることである！

兵1、また軍刀に手をかける。

兵1 もし、その中にあるレコードが放送されれば……日本は国の在り様を見失ってしまう

のだ。日本が日本でなくなってしまう！

女 ……。

兵1 何故ならそのレコードは……。

兵2 恐れ多くも天子の玉音である。

兵1 ……。

女 ……。

兵1 …その通り。

兵2 まあ、あんな畏^{かしこ}まった宣伝してりやあ誰でも気付くわな。

兵1 放送は本日正午。

兵2 昼間配電のない所にもこの時間は配電される事になっておりますときたもんだ。

兵1 …。

兵2 内容は対米徹底抗戦の大詔か、はたまた皇軍の敗退を報せる…。

兵1 黙れ！

兵2 …。

兵1 皇軍が敗れるなど方にひとつも有り得ん。

兵2 …。

兵1 だが、文弱な重臣どもが陛下を籠絡^{かごらく}し、終戦の詔を引き出したというのなら…これ

は無いと見えん。

女 …。

兵1 どちらにしろ、我々はそのレコード盤を検めねばならん。検めて、それが臣民らの戦

意を殺ぐような不埒な内容であつたなら、軍はそれを止めねばならん。

兵2 雑仕殿：我々は：特にこの男（兵1）は完全に：その（金庫）中身が玉音を収めた

レコードであると疑っております。

女 …。

兵2 ここは私の言を容れてその金庫をこちらにお渡しなさい。私は女人に力づくを用いたくはない。：今、その金庫を渡せば、我々は貴女を見逃しましょう。

兵1 貴様！勝手なことを…。

兵2 もし、ここで貴女が囚われれば、あなたにこのレコードを持つてくるよう命じた御仁もタダでは済みませんよ。

女 …！

兵2 本土決戦を妨害しようとした国賊を、多くの陸軍人は決して許さないでしょう。

女 …。

兵2 レコードは、どこかその辺りの部屋で見つけたことにでもします。あなたは命令を受

けた御方おんかたに、軍に先を越されたとても言っておけば良いのです。

兵1 ふん、手ぬるいな。その不届きな命令を出した輩の所にも案内してもらおう。

兵2 貴様、武士の情けを知らんのか。

兵1 大義の前には、小さな情けの一つや二つ、モノの数ではないわ。ここは陛下を取り巻く奸臣どもを一掃する好機。

兵2 我々はそのような命令は受けておらん…。

女、笑い出す。呆氣にとられる兵二人。

女 先ほどから聞いていれば、もはやこの中身が陛下の御声を収めた玉音盤だと決めつけんばかりの言い草。

兵1 違うというのか！

女 そうは申しませんが、私もこの中身が何であるのか存じ上げないのです。

兵1 何？

女 私は単なるお使いに過ぎません。申し付けられたものを、申し付けられた場所へお運

びしているだけなのですから。

兵1 ふん、そういうことか。

女 確かに、あなた方の仰るとおり、この中に入っているのは玉音を収めたレコードなのか
もしれません。しかしながら……。

兵1 なんだ。

女 ……しかしながら、私にこの金庫を運ぶように申し付けたのは……女です。

兵2 女官ですか。

女 はい。

兵1 ……だからどうした。

女 考えてもみてください。我々奥向きの女は、宮中諸般しよほんに耳ざとくはあつても、殿方の

なさる政治まつりごとに関心などは持ちません。そのような者がどうして玉音盤などを欲しが
るものでしょうか。

兵1 ふん、白々しい。

兵2 女儒、国の枢要に入りては、謀はかりごとをなし、国を傾けるの例えは古今東西、数限りなく

あります。女だからといって政治的野心を持たないなどとは言えません。

女 仮にそのような野心があつたとして何のために玉音盤など欲しがりました。そのようなものを持つていて政治的に得する女官など一人もおられませんわ。

兵1 宮中には聖上を廃し、弟宮わしつとみやを立てようとの動きもあつたと聞く。

女 昔の話ですわ。そのような女官はとづくに処罰されました。

兵1 息のかかつたものは残つて居おようが。貴様も魑魅魍魎しめいろうりょうの類か。

女 無礼な！大概になさい。

兵2 何にせよ玉音が放送されれば国民の戦意阻喪は甚だしくなる。さすれば戦争の継続は難しくなり……次にやってくるのは米軍。

兵1 ……米軍は陛下に退位を迫るやもしれん。それを利用して弟宮を擁立しようという一派も……。

女 なんとという人達！この国難の時節ときによくもそのようなおぞましい事が考えられますね。

兵1 ふん、差し詰め天皇制さえ残つておれば良いと考えている腰抜け重臣どもも、その一派に同意したんだらうよ。どうにか陛下を説きつけて終戦の大詔を録音し、すわ放送せんとしていたところに我らが乗り込んできた。

兵2 その金庫の中身は玉音盤であり…彼らは貴女に終戦の切り札を取りに行かせて、自分達は女官部屋の隅に隠れて震えている…違いますか？

女 違います！

兵1 どうだか。

女 埒らちもないことです！

兵1 …。

兵2 …。

女、ハツとする。兵二人、顔を見合わせる。

兵2 なにをそんなにムキになっておいでか。

女 ……ムキになど……。

兵2 我々は可能性のひとつを語っているにすぎません……なあ。

兵1 ああ。

兵2 そこまで動揺されるところを見ると……凶星ですか。

女 斯くも不敬な考えを聞かされれば誰しも憤こみおりますわ。

兵2 まあ、いいでしょう。……とにかく貴女の疑いは拭えません。さあ、その金庫をこちらへ。

女 お断りします。

兵2 まだ、ご自分のお立場がお分かりになつていらつしやらないようですね。

兵1 女ごと警備司令部にしよう引いて行けば良かろう。そこで不忠者どもの黒幕が誰なのかも洗いざらい吐かせる。

女 !

兵2 聞いたでしょう。このままではあなたの主人にまで墨が及ぶことになる。

女 ……。

兵2 協力を躊躇ためらえば躊躇うほど貴女の立場も悪くなります。

女 …。

兵2 さあ、これ以上お迷いあらず。金庫をこちらへ…。

女 …できません。

兵1 では、警備司令部まで同行を。

女 …参りません。

兵2 …困りましたな。

兵1 いい加減にせんか！ 貴様さつきから何を悠長に問答しておるのか。

兵2 仕方なからう。ものには順序がある。

兵1 選べ。玉音盤を抱えて、自分の足で警備司令部まで来るか、それともこのまま意地を張り、我々に玉音盤を渡してお前(女)は死体になるか。

兵2、刀の柄を掴む。

兵2 玉音盤をあずかり、このものは主の元へ返してやるという判断は。

兵1 ない。このように怪しげなるもの、見逃したとあつては軍務怠慢にあたろう。

兵2 こやつはこう言っておりますが。

女 …。

兵2 中身を検めるだけです。玉音盤でなければ私の責任であなたを解放しましょう。

兵1 貴様！また勝手なことを…。

女 嫌です。

兵1 …。

女 あなた方に任務があるように、私にも使命がございます。主人にお渡しすべきものを人目にさらしたり、ましてやお引渡しするなど…不忠極まりない。

兵2 ですから…。

女 殺せばよいでしょう。

兵2 …。

女 私を殺してお奪いなさい。不忠者と呼ばれるならそのほうがずっと増しです。

兵1 …よく言った。

兵1、居合いの構えをする。

兵1 お前の覚悟に免じて、苦しまぬように一発で殺してやる。念仏でも唱えろ。

女 お生憎様あいにく、宗旨違いです。

兵1 ……そうか。

女 ……。

兵1 死ね！

兵2 動くな。

兵2、ピストルを兵1に向ける。

兵1 ……何をしている。

兵2 刀を置け。

兵1 貴様、気でも触れたか。

女、この機に逃げ出そうとする。

兵2 逃げるな！

兵2、銃口を女に向ける。女、足を止める。

兵2 いいから、刀を置け。

兵1 お前自分のやっている事が…。

兵2 置け。

兵1、刀を置く。

兵2 よし。

兵1 どういうことだ。

兵2 ……すまん。

兵1 あ？

兵2 すまない。

兵1 理由を訊いている。

兵2 俺は、この軍の行動には…反対だ。

兵1 …そうか。

兵2 勘違いするな、俺も帝国陸軍人だ。本土決戦、以つて米軍に水際の一撃を加え、対等な条件で連合国と講和を結ぶべきだと…そう考えている。しかし…貴様も気がついていないだろう。今回の作戦の異常さを。近衛兵が守るべき宮城に踏み込み荒らしまわる。まるでクーデターだ。これは軍の上層部で何か起こっている…。

兵1 …。

兵2 思い出せ二・二六を。あるときも昭和維新・天皇親政を掲げて将兵1400名が立った。だが、その結果たるやどうだ。

兵1 …。

兵2 決起将校らは一名自決を除いて全員逮捕。首謀者らは銃殺刑。他ならぬ陛下からは叛乱軍の烙印さえも押され…。

兵1 結局…臆したということか。

兵2 断じて違う。俺は軍人が政治に容喙ようかいすべきではないと言っているのだ。

兵1 容喙だと？俺にそんな下心は無い。

兵2 神州不滅の聖戦完遂のと言って、帝の近侍に段比良振り回そうとすること自体がすでに差し出口なんだよ。

兵1 聞いたつたか。

兵2 一・二・二六で決起した将兵のうち、その目的を知っていたのは小数。大多数は何も知らないまま事件に巻き込まれた。…おかげで彼らは原隊復帰後、その行動を不問に附されたのだが。

兵1 ……。

兵2 ……今回も許されるだろう。一・二・二六を経た今…この師団決起の裏側を理解できぬものなどいないだろうが…我々は上官の命令に逆らえん立場ゆえな。…だが。
兵1 なんだ。

兵2 奥の女を斬ったとあつては言い訳などできぬぞ。

兵1 ……。

兵2 いいか、ここは穩便に…。

兵1 腰抜けの貴様と違つて俺は言い訳などせん。帝の御為を思つて行動するのみよ。

兵2 日本人の、それも女を斬つて帝の御為だと！お前は戦う相手を間違えている。

兵1 ここでこの女を取り逃したら終戦の詔は公のものとなる。さすれば米兵どもと戦うことも不可能になるではないか。

兵2 あの貧相な金庫の中には玉音盤があるとは限らんだろう。

兵1 この非常時に、殺気立った兵隊の中に飛び込んでまで持ち去ろうとしたものだぞ、玉音盤に決まっている！

女 …。

兵2 …聞いたでしょう。お願いですからその金庫を検めさせてください。なにも中身を奪い取ろうというのではない。

兵1 玉音盤でなければな。

女 …。(このあたりから、女官は徐々に正気を失う。あまり瞬まばたきもしなくなる。)

兵2 あなたには女官としての使命が…我々には軍人としての任務がある。お互いに辛いところですがこれだけは譲れません。

女 …どうしてあなた方は…。

兵2 は？

女 どうして…。

兵1 泣き落としか。

女 私の兄はアリユンシャン戦線において戦死しました。兄は…海軍将校でした。

兵1 ああ、そうかね。

女 あなた方は…あなた方軍人は、どうして歴史の大きな流れに逆らおうとなさいます。

兵1 逆らわずして日本人がこの世界で立つ道があるか。ただでさえ白人どもに押し捲まくられているものを。黒船来航以来逆らいつばなしよ。

女 逆らわねば兄も死ぬことはなかった。私の言うことさえ聞いていれば…。

兵2 兄上様のこと、お悼み申し上げます。しかしながら、兄上様は軍人としての本分を立派に果たされました。この上は、貴女も軍に協力されることが、兄上様の菩提を弔うことに…。

女 兄は最初、南方戦線に送られる予定だったのです。それを軍の都合で突然アツツ島方面へ…。

兵2 致し方ありません…兵は戦地を選べないものです。

女 私は方角が悪いからと申し上げたのに…。

兵2 確かに、当時の南方戦線は戦果赫赫たるものあり。彼の地に送られるのを希望する

将兵も多うございました。しかしながら、現在では…。

女 都から見て丑寅の方角は元来鬼門…。その上あの年は卯うの方に太金人だいこんじん様坐まします

というのに。

兵2 …。

兵1 …なに？。

女 私は兄に、戦地に着いても極力、真東には進軍しないよう忠告しました。それが…

恐らく東の方に米艦隊かたでも見つけたのに相違ありません。一本気な兄は迷うことな

く…。

兵2 お待ちなさい。

女 はい。

兵2 それが貴女のおっしゃる歴史の大きな流れか？

女 …。

兵1 あははは、とんだ神懸りかみがかだな。

女 そのように聖師様が仰られました。

兵2 聖師様？

女 …。

兵2 誰です、それは？

兵1 おい、貴様いつまでこの齋宮いじみやのご託宣たくせんにつき合ってる積りだ。

兵2 …。

兵1 …いつは完全にどつかの霊媒師に入れあげちまつてる。真面目に相手して損したぜ。

女 …。

兵2 雑仕殿…そういう話でしたら我々はこれ以上とりあう事はできません。

女 …。

兵2 素直に金庫を検めさせる気はないのですね。

女 …。

兵2 …貴女を…連行します。

兵1と兵2、両脇から女を抑える。

女 触るな！（今までとは一段、違うトーンで。やや神さびていただきたい）

兵1と兵2、ビクリとして手を離す。

兵1 貴様、手向かうか！（捨てていた刀を拾い上げる）

女 私が申している歴史の大いなる流れとは…このあとやつてくる、世の立て替え立て直しのことです。

兵2 …。

兵1 立て直し…？

女、このあと刀を構えようとする兵1にズンズン迫ってゆき、自説を滔々と語る。

女

かつて、世界は一つでした。神武天皇即位前の天皇すめらみことは日本だけの天皇すめらみことではなく世界天皇、万国棟梁だったのです。その時代は大いなる和の時代、まさに大和の時代だったのですよ。

兵1、頭の上で指をクルクル回すが、女が振り返るとギクリとする。

女

皇祖神は宇宙より来たりて、その靈性も高く、天孫たちは御命みいのち長くして、数百年も長生きしました。しかし、時と共に日本人は靈的に墮落し、その命短くなり、この業カルマを洗い流すため、世界中に大地震と大洪水が起こったのです。ミヨイ、タミアラといった大陸が海の底に沈み、地球は泥の海と化しました。

この数次に渡る大災害が起こるたびに、この世は立て替え、立て直しを繰り返してきました。そして、今次、この大東亜聖戦の敗北…これをきっかけに最後の立て替え立て直しが起こります。

兵1 貴様…今なんとほざいた！

女 私が申しているではありません…聖師様が私を通して語っているのです。

兵1 おい、聞いたか、こやつが伏し拝んでいる霊媒はとんでもない事を触れ回っているぞ。

兵2 …。

兵1 玉音盤を持つて来いと言ったのも、その聖師様とかいうイカサマ師か？

女 イカサマ師ではありません。

兵1 イカサマ師だよ！いやしくも陛下の近侍ともあろう者がなんでこんな説法に惑わされるか！それも皇国の敗北を口にするなど。

兵2 では、貴女にその金庫を持つてくるように言われたのは、そもそも聖師様なのですか？

女 …。

兵2 貴女のお仕えしている女官殿も、聖師様のお弟子なのですか？

女 …。

女、氣を失う。(兵1受け止める。金庫は絶対に放してはいけない)

兵1 おい！

兵2 …。

兵1 まったく、都合よく気絶しおる。おい、起きろ。(女の頬を軽くはたく)

女 …。

兵1 …本当に気絶しておる。なあ…。

兵2 …先帝にあつては…御体質、虚弱であられたことは知っているな。

兵1 何だ突然。

兵2 今上が摂政に就任された頃には相当にお悪かったと聞いている。

兵1 …ああ。もはや侍従に支えられねば歩けんほどだったらしな。だが、それがどうした。

兵2 当時のお后…つまり現在の皇太后は非常に信心深いお方で…。

兵1 …。

兵2 先帝の御健康にご不安があるのは、先帝が宮中祭祀を軽んじているからではないかと考えていたらしい…そういう話を聞いたことがある。

兵1 ああ、島津ハルのことか。

兵2 うむ。…皇后様は自ら神道を学ばれるようになり、仕えていた女官たちも先帝快

癒を祈願するためあちこち効験のありそうな宗教に詣て行くようになった。

兵1　そして、その多くがそのままはまり込み、抜け出せなくなった。島津ハルもその一人だな。

兵2　元女官長の身でありながら新興宗教にそそのかされ、今上天皇の夭折を予言し…

弟宮の擁立を主張するようになった。

兵1　結果的には不敬罪で逮捕となったが…未だにこの手合いの女官は宮中に多く居残ると聞く。この針妙もそのクチか？

兵2　だろう。軍と同じで、奥向きも上の命令は絶対らしいからな。先輩が氏子なら後輩も氏子、先輩が檀家なら後輩も檀家ってわけだ。

兵1　ふん、長髪賊どもが…気色の悪いことだ。軍隊で良かったぜ。

兵2　金庫を持ち出せとこの針妙さんに命じた女官も、やはり何らかの宗教に所属していると見て間違ひなからうな…そして、これが終戦派の重臣たちと結んでの行動だとすれば、この中身はまず間違ひなく…。

兵1 …なあ。

兵2 うん？

兵1 今なら中身…簡単に検められるぞ。

兵2 …ああ。しかし、失神してもしつかりと抱きかかえておるとはな。

兵1 よほど大事なものだと言いついておるのか…玉音盤に相違あるまい。

兵2 うむ…しかし…。

兵1 なんだ。

兵2 寝込みを襲うというのは武士道にもとる行為ではないのか？

兵1 はあ？貴様何を言っている。

兵2 しかも、他人の秘密を無断で覗き見るといのは道義的にも…。

兵1 人のことを幼年学校出のカチカチだなどと言いついておたくせに…自分の方がカチカチではないか！貴様、山形の百姓であろうが。

兵2 百姓だと、家は名字帯刀も許された豪農…。

兵1 俺は男爵家の三男坊だ。見よ、サムライなど一人もおらんではないか。

兵2 …。

兵1 お前は。

兵2 農民。

兵1 俺は。

兵2 華族。

兵1 武士道もへツタクレもあるか。

女、軽くうめく。

兵1 馬鹿者！お前が大声で喋るから起きそうになつたぞ。（小声で）

兵2 …ええ？

兵1 おい、手をほどけ。

兵2 お、おう。

兵1 よし、じゃあ金庫を奪え。奪ったら女をおいてこのまま退散だ。

兵2 しかし…そんなゴソ泥のような。

兵1 お前は。

兵2 農民。

兵1 そうだ、それ以上でもそれ以下でもない。武士道にもとろろが盗みを働こうが、元

来お前は貴族の命令には逆らえん血が流れているのだ。

兵2 何か納得いかん。

兵1 いいから、持ち去れ。

兵2 う、うむ。

兵2、金庫の取っ手を掴む。すると、女の手が兵2の手首を掴む。

兵2 !

女 ……私は……。

兵1 お……お目覚めか。

女、金庫を掴んだ男の手を見て驚く。

女 あなたは……！近衛兵ともあろうものがコソ泥のような真似を。

兵2 …ええ？

兵1 そうだ貴様、恥ずかしくないのか。

兵2 な…。

女 手をお離しなさい。

兵1 そうだ、離せ。

兵2、不本意そうにしながら金庫を放す。

女官、金庫を守るように身を丸める。

兵2 …。

女 …また。

兵2 また？

女 かげき 巫覡です。

兵1 …ふげき？

兵1と兵2、顔を見合わせる。

女 …体が疲れたり、とても緊張したりすると…自分でも思いもよらないことを口走り始めて…。

兵1 それを巫覡というのか。

女 はい…あの。

兵2 聖師様がそう言われましたか。

女 !

兵2 あなたの言葉は、あなたを通して聖師様が語っているものだとても。

女 …私は…そんなことまで。

兵2 …はい。

女、顔を伏せる。

女 ……どういたしましょう。要らぬことを申して。

兵2 あなたの責任ではありません。あなたは心神耗弱しておられたのですから。

女 ……ああ、叱られる。

兵2 叱られる？誰にです。貴女の主殿あるじどのにですか？

女 ……

兵1 おい。(兵2に小声で)

兵2 うむ。

兵1 ここまで来ると憲兵の仕事だ。我々の手に負えん。

兵2 では、どうする。玉音盤を断念して転進するか。

兵1 馬鹿を言え。いいか、あの女は今精神的に参っている。

兵2 うむ。

兵1 叱責を恐れて主の許にも戻れん。そこに上手く付け込んでだ…女ごと玉音盤を警備司令部へ連れて行く。

兵2 ほう。

兵1 しかる後、あの金庫を取り上げ、女の身柄は憲兵隊に引き渡す。

兵2 なるほど。

兵1 まず俺が先陣を切る。貴様は援護しろ。

兵2 良かろう。

兵1 (咳払い)雑仕殿。

女 …。

兵1 どうやら我々に聖師様とやらの存在を知られてしまったことでお悩みのようだが。

女 …。

兵1 そのことについては我々は他言しないことを誓いましょう。

女 …。

兵1 我々としては貴女にそのまま気落ちされても困りものなのです。なあ。

兵2 え、ええ…。困ります。

女 …。

兵1 …何か言え。(小声で)

兵2 ああ…。我々としては、つまり終戦の詔が放送されなければ何ら問題はなく。あ

あ…。ですから…。

兵1 ああ、そう…。つまり、金庫の中身なぞ見せずとも良い。ただ、今日の正午まで我々の眼の届くところに居てくれれば良いわけです。

兵2 そうして仮に終戦の放送があつた場合には、金庫の中身は玉音盤ではありえないわけですから何処へなりとも行つていただいて結構です。

兵1 また逆に、放送がなかつた場合には、もはや米軍の本土上陸は止められません。玉音盤は無用のものですから、何処へなりともお行きください。

兵2 ですからですね、つまり……。

兵1 今日の正午まで警備司令部に居てください。ね。

兵2 送りますから。

女 できません。

兵1 貴様！我々がここまで譲歩しているというのに……。

兵1、刀に手をかけようとする。兵2、必死で止める。

女 「これが玉音盤だとして……あの方がこれを必要とされるなら、正午前には届けなければならぬでしょう。」

兵1 貴様現実が解つておるのか？我々に捕まつた以上もはやそれは不可能なのだ！

女 では、殺しなさい。他言無用の事まで漏らしたのです。生きていたとは思いません。

兵1 よおし……心意気に免じて一発で……。(刀に手をかける)

兵2 だから……穩便にせよと言っておるだろうが。(兵2、銃を兵1に押し付ける)

兵1 お前こそ穩便にできんのか。

兵2 ……よくお考えなさい、玉音盤があなたの主の手に渡つたとしたら……必ずや終戦派の重臣や、その聖師様とかいう人物に利用されることになるでしょう。……貴女はそれで良いと思うかもしれない。

女 ……。

兵2 だが、もう一歩先を読んでください。終戦派の手に玉音盤が渡れば、これは必ずやラジオ放送され、日本は米軍を迎え入れることになりましょう。すると、日本は米兵らによる報復の嵐に見舞われます。大八州は植民地化され、傀儡政権が立ちましようましよう。……当然、今上陛下は戦争責任者として退位を余儀なくされます。いや、そのお命さえ危ういと言わなければなりません。

女 ……。

兵2 帝の近侍として、貴女はこれを善しとなさいますか？

兵1 考えたくもないが、玉音盤が終戦派に渡るならまだマシなほうかもしれないぞ。その聖師様とか言う靈媒の手に落ちたらそれこそどうなるか知れたものではない。……まあ、

或いは玉音盤を質に終戦派連中を恐喝……弟宮を擁立するように仕向け、その後の傀儡政権で権力を握る積もりなのかもしれんが。

女 聖師様は……。

兵1 あ？

女 そのような俗事に一切興味はございません。

兵1 どうだかな。

女 それにあなたは聖師様のことを霊媒霊媒と申しますが、神懸る力をお持ちなのは奥様ですわ。

兵1 ほう、女房が霊媒なのか。

女 ここまで申しましたからはつきり言わせていただきますが、聖師様は弟宮様擁立だとか、権力掌握だとか……そのようなことには全くの無頓着です。

兵1 自分から野心があるとは言わんだろう。それに、女を霊媒本尊に仕立てて自分は黒幕というやり口もますます怪しい。

女 皇祖神アマテラスも女ではありませんか。古来より神懸^{かみがか}らんは女の得手^{えて}。聖師様は奥

様と荷を分け合つて神かんながらの道を歩まれているだけのことでございます。

兵2 では、貴女の神懸りもその細君から学ばれたのか？

女 学んだとか、習ったとか…巫覡は生まれつきの才能が大きく影響するものです。

兵2 では、生まれた頃からあのように発作的に神懸かる体質だったか？

女 いえ…聖師様の教えに触れたのがきっかけで…。

兵2 才能が開花されたと。

女 開花と申しますか…聖師様のお言葉を聴いた瞬間に意識が昏倒して…私にとって

はむしろ苦しみの始まりでした。

兵2 雑仕殿…。

女 はい。

兵2 あなたは…その聖師様と…直接にお会いしたことがないのですか？

女 …。

兵1 どういうことだ。

兵2 つまり、俺は阿南陸相を尊敬しているが…一面識もない。遠くから見たことはあるが、声は聞いたことがない。彼の命令には従うが、直接命令を受けたことはない。

兵1 なるほど。

兵2 そういう意味では、俺もこの人も立場は同じだからな。

女 ……

兵2 ただ、私の場合と違うのは……あなたの信仰心は、あなたの主である女官殿への忠誠心の裏返しだということです。

女 ……

兵2 最初から気がついてはいたんですがね……聖師様の存在が我々に知れたときも、あなたは何より主殿の叱責を恐れている様子でしたし。

女 そのような……

兵2 神懸かっただけのおいでなのあなたの言葉は聖師様が語る言葉なのでしょう？

女 ……はい。

兵2 聖師様が語った言葉の廉かどで聖師様に叱られるのも不自然ですからな。

兵1 ああ、そうよな。

女 ……

兵2 そこで私が思ったのは、貴女は聖師様という人に直接会った事はないということだ。

もし直接聖師様の教えを受けているのなら、貴女の宗教的情熱は、自らの主を通り越して聖師様に直接注がれるでありましょう。……しかし、貴女の言動を聞く限り、その情熱の多くは貴女の主殿に向けられている気がいたしました。

兵1 では、玉音盤を欲しがっているのは聖師様とかいう奴ではなく、その女官か？

兵2 そうとは言いきれん。聖師様が発した命令が、その女官を通じてこの人に届いたこともあり得る。

女 先ほどから聞いていれば憶測ばかりではありませんか。この金庫の中が玉音盤であるとも限らないし、それに、この一件と聖師様を勝手に結び付けないで下さい。

兵1 しかし疑いを容れる余地は大いにある。

女 それが憶測だと申し上げているのです。

兵2 では、貴女と聖師様が会った事がないという私の見通しも、単なる憶測でしょうか。

女 ……。

兵2 貴女は危険だ。この真相を何も知らないまま政治的に利用されている恐れがある。

女 聖師様とは……お会いしたことはありません。

兵1 やはりな。

女 しかし、お言葉は聴きました。

兵1 あ？

女 聖師様の教えに深く帰依する中で、いつしか私は時と場所を選ばず、聖師様のお言葉を聞くことができるようになったのです。

兵2 …それはあなたの思い込みだ。

女 思い込みなものですか…私の主も一緒に聞いたのです。聖師様のお声を。

兵2 あなたは真面目です。

女 ええ。

兵2 主に聞こえるといわれれば、聞こえないものも聞こえてしまう。いずれは自分も騙してしまふほどに。

女 そのようなことは…。

兵2 …。

女 ほら、今も聞こえます。

女、神懸り状態に陥る。

女 この者を解き放て。

兵1 …。

女 解き放て…。

兵2 落ち着きなさい。

女 貴様ら、この箱が欲しいのかえ。

兵1 欲しい。

女 や…ら…ぬ。

兵2 あなたが聖師様か。

兵1 !

女 いかにも。

兵1 おい、この女の茶番に付き合うつもりか。

兵2 なにも、中が玉音盤でなければ奪うつもりはない。検めさせてはもらえないでしょうか。

女 な…ら…ぬ。

兵2 何ゆえ。

女 世の立て替え建て直しになくはならぬ品ゆえよ。そうおいそれとは見せられぬわ。

兵2 それほどの逸品、是非この目で見たいものです。

女 な……ら……ぬ。

兵1 いい加減にせんか！もう夜が明けるぞ。コイツをぶった切つて玉音盤を……。

兵1、女ににらまれる。兵1、慄然とする。

女 この者に手を出してみよ。その祟りは貴様の係累七人に及ぶぞ。

兵2 その中に玉音盤があるかもしれません。世の立て替えも結構ですが、このままでは日本は上陸してくる米軍に潰されてしまいます。立て替える日本自体がなくなったらあなたも困るでしょう。

女 小さい。

兵2 というと？

女 この世を日本のみと捉えるか？

兵2 そうは申しませんが……それでは世界全体を立て替えるおつもりか？

女 そうよ。

兵1 ふん、そいつは気宇壮大で結構だ。

女 貴様らが卑小になつたに過ぎん。

兵1 なんだと！

女 上古代、すめらみこと 天皇の皇子ら二十五人が世界中に派遣された。彼らはミットソンと呼ば

れ、それぞれの地域の民王として崇められた。天皇は世界の地域を六つに分け、ミット

ソンの中から六人を選んでそれぞれに治めさせた。これらの国は支国えだぐにと呼ばれ、

あめのしほのくに

天越根国……つまり今の日本が支配した。

兵1 それでは日本が世界を支配していたことになるではないか。

女 だからそうなのだ。

兵1 馬鹿馬鹿しい。

女 先ほども申ししたが、かつて^{すめらみこと}天皇は世界天皇、万国棟梁であった。ところが幾星霜を

経て日本人は靈的に墮落し、この大八州おおやしまを統べるのみとなった。

兵2 ……。

女 この大東亜聖戦は…敗北する。

兵1 貴様あ、またもぬけぬけと。

女 米国勝利で安定を取り戻すかに見えた世界は再び混乱を迎え、世界最終戦争、ハルマゲドンが起こるだろう。その時、高い靈性を以って私と共に立ち上がるのが次代の

すめらみこと
天皇よ。

兵1 ああ、いい加減にしろ！こつちまで頭がおかしくなりそうだ。

兵2 不敬ですな。

女 ああ？

兵2 私と共に立ち上がるですと？…共に？天皇陛下が？

女 いかにも。

兵2 何故、天皇陛下に従つてと言えないのです。それではあなたと天皇陛下が同等のようではありませんか。

女 そんな…細かいこと。

兵2 いいえ、一天万乗の君主に対して共に立ち上がるなどは。

女 だから、そこはお互い協力するから…。

兵2 協力？

女 ああ…だからどっちかかって言うのと私のほうが多めに。

兵2 はつきりおつしやい。あなたか、天皇陛下か、偉いのはどちらですか？

女 いや、だから…それは。

女、気絶する。兵1支える。

兵1 あ。

兵2 …。

兵1 忙しい奴だ。神懸かったり気絶したり。

兵2 …。(僅かに微笑う)

兵1 どうした。

兵2 阿呆らしい。

兵1 なに？

兵2 神懸りなどこの世にはない。

兵1 ああ？しかし現に。

兵2 この針妙は、始めつから終わりまでただの雑仕だ。

兵1 そりゃそうだ。だが、入っちゃうんだろ？こやつこやつの体に聖師様の御霊ごりょうだか生霊だか。

兵2 貴様、本気でそんな世迷言を信じておるのか？

兵1 信じたくはないが、しかしこやつ凄まじい目をしておったぞ。あれは人間の目ではない。

兵2 ああ、俺も最初は騙された。だが、人間の思い込みには限界がある。

兵1 思い込みだと？あれがこの女の思い込みだというのか？

兵2 この人は天皇陛下と聖師様の立場に差をつけることができなかつた。

兵1 ああ。

兵2 恐らくこの針妙の主人もはっきりとは説明しにくい事なのではないか。天皇陛下と聖師様は共に至高の存在である故にな。

兵1 どちらが偉いと問われても困るか…。

兵2 この人にとっては天皇陛下や聖師様よりも、自分の主のほうんが畏れ多いのかもしれない。

兵1 なるほど、だから主の説明できないものは自分にもできないと。

兵2 ああ、いかに自分に聖師様が憑り移っておると思ひ込んでもな。

兵1 …しかし。

兵2 うん？

兵1 思ひ込みでこうも見事に気絶できるものか。

兵2 毛唐の女は下品な冗談を言われただけで気絶したらしいぞ。

兵1 はは、本当か。

兵2 昔はな。貴婦人は失神するのが貞淑の証だったそうだ。

兵1 それこそ、思ひ込みのなせる業か。

兵2 そういうことだ。

兵1 …おい。

兵2 おう。

兵1 …今ならこれ(金庫)、簡単に奪えるぞ。

兵2 まだ懲りんのか。

兵1 おう、さつさと玉音盤を持ち帰って、こんな薄気味の悪い女とはおさらだ。

兵2 …。

兵1 今度は仕損じるな。

兵2 俺がやるのか？

兵1 玉音盤を持ち帰り……本土決戦だ。

兵2 ……。

兵1 早くやらんか。

兵2 ……よし。

兵2、先ほどと同じように女の手を解いて、さらに金庫に手をかける。案の定、女、兵2の腕を掴む。

兵2 ……！。

女 ……また。

兵1 ……ちっつ。

兵2腕を解こうとするが、女、放さない。女、意識がはつきりとし始め、握った兵2の腕を見て驚く。

女 あなたは！一度ならず二度までも。

兵1 そうだ、性懲りもなく。

兵2 ええ！だって……。

女 問答無用です。手をお放しなさい。

兵2、渋々手を放す。女、金庫を護るように背を丸める。

女 ……ああ、私は……また。

兵2 ……。

女 ご堪忍下さい。もうお帰し下さい。

兵1 できんな。

女 ああ。

兵2 ……貴女は……神懸りではありません。

女、顔を上げ兵2を見る。

兵2 貴女の主に忠義を尽さんばかりの、思い込みです。

女 あれが思い込みだと仰るのですか。

兵2 …はい。思い込みであるからには、貴女の意味で如何様にも克服できるはずです。

女 克服とは異なることを仰るものです。巫覡は苦しみではありませんが、聖師様のお言葉が私の体を通つて出て行く、喜びでもありません。

兵2 そうでしょうか。私の目には、お上への忠誠と聖師様への信心の板ばさみにあつて苦しんでおる貴女の本心が見受けられました。

女 それは、あなたが信仰というものに無理解だからです。私が苦しんでいるのは、巫覡が時と場所を選ばぬ故。立ち入ったことまであなた方に聞かれた情けなさ故です。

兵1 立ち入られて困るのは、お前ら主従が内心後ろ暗いからだろうが。

女 …。

兵1 天皇陛下や皇軍の敗北を引き合いに出して説法する宗教など不謹慎極まりない。

お前の主がそのようなものを伏し拝んでいるとしたら、その目を覚まさせてやるのが本当の忠義なのではないか？

女 …。

兵1

それにはまずお前自身がその迷妄から解放されることだ。そうでなければ主とこのまま地獄に落ちるだけだぞ。…お前が心の底から信じられないものは、きっとお前の主も信じ切れてはおらん。

兵2

お前…。

兵1

なんだ。

兵2

意外と賢かったんだな。

兵1

…。

女

…あなた方も。

兵1

うん？

女

あなた方も私と同じではありませんか。

兵1

…なに？

女

上官の命令は絶対。あなた方の頭上には本土決戦という神が君臨し…。

兵1

貴様、淫祀いんし邪教と陸軍を混同するか！

女

聖師様の教えも、今はまだ理解するものは少のうございます。しかし、大本營の発表とて、今、本気で信じているものがどれだけのいるでしょうか。…我々の教えをあなた方

は不敬だ不敬だと申しますけれど、神州不滅やら聖戦完遂やらという理屈を振りかざして宮城に踏み込んでくるのは不敬ではないのですか？

兵1

これも陛下の恩為を…。

女

ですから、陛下は終戦を望んでおります。あなた方は陛下の望まない本土決戦を主張し、見通しの立たぬ戦に臣民を巻き込もうとしている。…米軍を追い返せたのなら良いでしょう。しかし、失敗した場合は？忍従に忍従を重ねる臣民を焦土の中に放り出して、この上まだ戦を続けるのですか！あなた方が我々を理解できないように、私もまたあなた方を理解できません。

兵1

この敗北主義者があ、言いたい事を抜かしおって！米軍に降伏すれば日本は必ずや報復を受ける。それは、徹底抗戦の惨害をはるかに凌ぐ損失となり得るだろう。それならまだしも、植民地化され、分断され、国がなくなるかも知らん。父祖が二千年以上かけて築いたこの国が無くなる！？俺にはそのような事は堪えられん。

女

国はあつても人が死に絶えては仕方がないでしょう。

兵1

では、戦わずして降伏するのか。国が滅び、植民地となれば我々は奴隷扱いを受けるのだぞ。そのような事態になつてまだ生き延びたいのか？

兵2

…いや。

兵1 ……ん？

兵2 飽くまで仮定の話なんだが……。

兵1 何だ。

兵2 仮に植民地化されても、今ならそのほうが良いかも知らん。

兵1 貴様まで何を言うか！

兵2 ソ連が対日参戦したのは知っているだろう。

兵1 ああ。

兵2 奴らが本土にまで上陸したら、状況はますます複雑化する。

兵1 ……。

兵2 一旦植民地化されても、独立する道はある。その時交渉する国は一カ国の方が良い。

兵1 降伏した後、米国がソ連や中国に日本分割を提案したらどうする。いつ降伏しようが同じことではないか。

兵2 いや、米国は日本を見越して満州の権益も狙っている。その後の共産主義との戦いも睨んでいるだろう。……終戦後、ソ連の干渉を招いたり、日本人の反感を買って占領を難しくするような方針は採らないのではないか。

兵1 しかし……。

兵2 …今降伏すれば、植民地にされるかもしれないが、分割されずに済むかもしれない。

兵1 …。

女 …我々は…。

兵1 …何だ。

女 立場は違えど、信ずるものために行動していることに違いはないのです。それについて、私の信心は揺らぎません。…反して。

兵1 …。

女 あなた方の信念は揺らいでおられます。

兵1 何を言うか…。

女 降伏ということに決されれば、玉音盤は不要でしょうから私は立ち去らせていただきますが。

兵2 貴女として…揺らいでいるではありませんか。

女 …。

兵2 結局、偉いのはどちらです？天皇陛下ですか、その聖師様ですか。

女 …聖師様は…ゆくゆく、この国の精神的指導者として立たれるお方であり、私はそう信じております。

兵2 では、陛下は。

女 論ずるも畏れ多いことなれど、陛下は国家元首のお立場にあらせられます。古くか

ら祭祀主としても臣民の崇敬を集めておられますが、今では世俗的な君主としての性格が強くなりましたゆえ。

兵2 …。

女 精神的指導者と国家元首では、比べる対象が違いすぎましょう。…弘法大師と徳

川家康、どちらが偉いか聞かれているのと同じことすわ。どちらも偉大であることに変わりはありませんが。

兵2 逃げを打たれましたな。

女 逃げだなどと。

兵1 おい、こいつ本当にぶった切ってはいかんのか。

兵2 いかん。

兵1 この期に及んで下らん逃げ口上を打つ^ぶなどとは呆れ果てた。こやつこそ君側の奸よ。

俺は処罰されても良いから今すぐ斬らせろ。

兵2 いかん。

兵1 何故だ、この国のためになら俺はこの命一つ、くれてやる覚悟だ。

兵2 国のために命を、惜しめ。

兵1 近衛兵たるものが何たる物言いか！命を惜しめとは。

兵2 そうだ……貴様のその血気、米国への復讐戦にこそ用うるべきだ。

兵1 ……復讐戦だと。

兵2 ああ、この戦は……敗ける。

兵1 ！

女 ……。

兵1 貴様、今なんと……。

兵2 この戦は……敗けるぞ。

兵1 おのれ！情けない、我が朋輩ほうばいの中にまで賊がいたか！

兵2 事実に対して口を噤つぶんでいるほうがよほど賊だろう。

兵1 もうよい、戦況芳しからぬは貴様のような賊が軍に入り込んでいるせいよ。

兵2 先ほどまで迷っていた。だがもはやこの戦の趨勢は明らか。

兵1 勝負は最後まで分らん。本土決戦に持ち込めば……。

兵2 なあ、今、この国は大きな政治判断をしようとしている。

兵1 うるさい！貴様の理屈など聞く耳持たぬわ。皇国に巢食う獅子身中の虫め。

兵2 思えば二・二六以来、暗殺に怯える重臣らに代わつて、我ら軍人がこの国を引つ張つてきた。

兵1 本土決戦に持ち込めば軍民一体、一に人の和、二に地の利……。

兵2 だが、これは立憲君主国家としてはいささか異常な形だと言わざるを得ない。

兵1 黙れ！黙らんか！黙らねば……。

兵2 今、やつとこの国の正常な機構が動き出した。俺はこれを尊重したいのだ。

兵1 黙らねば……斬る。

兵2、刀に手をかける、暫しの睨み合い。兵2動き始める。兵1の前を通り過ぎ、女の前に立つ。そして、手を差し出す。

兵2 お渡し下さい。

女、金庫を後ろ手に隠す。

女 何度請われても無駄です…。

兵2 元あつた部屋に戻します。

女 ……え。

兵1 なに!?

兵2 歴史の大きな流れに逆らうなど申されたでしょう。そうしたいと思います。

女 私が申したかったのは…。

兵2 ここで我々に会つたのも神仏かみほとけの思し召しでしょう。…本土決戦に転ぼうと、玉音盤

が聖師様に渡ろうと、この戦は敗れます。それが歴史の畢竟と心得る。

兵1 皇軍は敗れん! 山に分け入り、野に臥し、草を食つても抗戦する。

兵2 うむ、お前は負けなければよい。

兵1 なに?

兵2 雌伏せよ。

兵1 どういうことだ?

兵2 米兵が上陸しても、今の陸軍では満足な戦は出来ん。

兵1 貴様、自らの軍隊を侮るのか！

兵2 最後まで聞け。今、満蒙には関東軍をはじめ100万の将兵が足止めを食っている。まず彼らの復員を待て。

兵1 …。

兵2 米国はソビエトとの戦いに備えて日本国内の生産手段を完全に破壊することはしな
いだろう。今の国力では本土決戦といえども補給が続かん。第二に生産力の回復を待
て。…然る後、ソ連南下に対処すべく、占領軍は北上せざるを得なくなるはずだ。こ
の時を狙って、お前は有志を募り、充実せる兵力と物資の下、日本独立の旗を揚げ
よ。

兵1 そう上手く事が運ぶか？

兵2 米国の支配下になつても、陸軍人が…いや、日本人が国を想う気持ちを失わない限
りな。…我らは必ずや起つ。

兵1 …ああ。

兵2 何だ、自信がないのか。

兵1 馬鹿を言うな。我ら陸軍、どのような苦境にあらうとも志は変わらん！…だが、

建国以来、他国に踏み込まれたことなきこの神州を踏み荒らさるるなど、先祖に会

わす顔かんはせも無いわ。

兵2 一度、敗れて再起するのはあながち恥ではない。楠正成もそうだろうが。

兵1 ふん、楠公か。

兵2 そうよ、忠君愛国の見本ですら敗れ、恥じ入ることなくまた起つ、況や我々をや。

兵1 …。

兵2 …まあ、敗れ方にも色々あるがな。

兵2、女のほうを向き直る。

兵2 一つ、政府の手で玉音を放送し、混乱を最小限に抑えながら軍を武装解除させる。

一つ、対米徹底抗戦、国土が荒廃する中、ソ連軍が侵入。当然、本土は分割され、事実上の敗北。

兵1 …。

兵2 さらに一つ、宮中女官の手を通して、玉音が新興宗教の手に渡る。教団と政府、本

日正午までの崖つぶちの交渉。玉音、放送されるものの、成立する米国傀儡政権には弟宮様が即位。敗北後の日本は米国の他、新興宗教の多大なる影響下におかれる。

女 ……聖師様は、そのようなことはなさいません。

兵2 3つ目は私の想像ですがね…しかし、未知数です。もつと酷ひどい事になるかもしれない。

女 ……

兵2 どうせ敗けるなら、私は最初の案を選びたい。敗北が避けられぬならば、これが歴史の大道とも言えるでしょう。

女 これが玉音盤でないかもしれません。

兵1 玉音盤かもしれん。

兵2 はは、もうそのことについては散々話し合っただではないか。だが、雑仕殿…その金庫の中身が玉音盤であった場合のことを考えてください。

女 ……

兵2 あなたの教団は、聖師様の教えを広く世に伝える気はないのか？

女 善き教えは自おのず広がつていくものと考えます。

兵2 私は違うと思う。どのような組織でも、ある程度大きくなれば政治と衝突します。

自由な活動は妨げられる。そして、妥協するか、打ち克つまで戦うかを選ばねばならない。

女 …。

兵2 …その金庫が玉音盤を収めているならば、聖師様は政治に打ち克つ道を探ろうとしておられます。

兵1 打ち克つとは？

兵2 政府内の弟宮様擁立派の中には、聖師様を信ずる者も多いのではないか。大奥にまで信者が居るくらいだからな。

兵1 なるほど、玉音盤を質に終戦派を取り込み、弟宮様を即位させ、信者連中が大きな力を持てば不敬な教えを広めようが、教団の勢力を拡大しようが誰も文句は言えなくなる。

女 すべて想像です。

兵2 ええ、最悪の想像です。しかし、この最悪の想像が実現すれば、あなた方、女官主従にも最悪の運命が待ち受けています。

女 …最悪の運命？

兵2 はい。

兵1 お前ら、教団組織の中じゃ下つ端の下つ端なんだよ。こんな使い走りやらされてるよ
うじゃな。

女 …だからどうだというのです。

兵1 分らんか？ 聖師様が権力を握るといふことは、表立って大臣や何かになるつてこと
じゃない。まさに黒幕になるつてことだ。…そうなた時に、自分がいかにして権力掌
握したか知っている連中を、放置してはおかないだろう。

兵2 …お二人とも残念な最期を遂げられるか…それとも一生軟禁でもされるか。

女 ですから、聖師様はそのような…。

兵1 お前、一度も会つたことがない聖師様をどうしてそんなに信用できるんだ。

女 私は聖師様をこの胎たいに収めることができるのです。(女、腹をさする)この時、両者は
一体不可分…自分を疑うことはできませんわ。

兵1 …こりゃあ駄目だ。

兵2 ですから、それが思い込みと…。

女 思い込みではありません…確信です。

兵1 …。

兵2 …では、それでも結構です。しかし、その金庫をあなたの主に渡すことによって、貴

女ばかりか貴女の主にまで危害が及ぶ可能性を、よくよく考えなさい。

女 …。

兵2 …往かれよ。

兵1 おい！

兵2、追いかけてようとする兵1を制する。

兵2 どの道敗ける。混乱は避けられん。そこまで信じるものがあるなら、想いを遂げさせてやろう。

兵2、敬礼。女、暫し沈黙して二人の兵を見ている。後、一礼して立ち去ろうとする。

兵2 その金庫の中身は…玉音盤です。

女 …。

兵2 小官はそう信じます。

女、呻きながら床に膝を着く。兵二人、やや身構える。

女 ……この者を逃がしてよいのかえ。

兵2 いい。

女 もうちよつと聞くことはないのかえ。

兵2 ない。

女 冷たいのう。

兵2 冷たいことはない。思うとおりにさせてやった。

女 これが欲しいのじゃろ、ほれ、ほれ…。

女、舞台の中央に金庫を置く。下手に戻って正座。

兵1 何の真似だ。

女 こうなることは、天孫降臨から決まっていたこと故。

兵1 はあ？

女 ひこほのににぎのみこと あまくだ
日子番能邇々芸命、天降りまさむとする時に、天照大御神、其の往く末を案じて

くにのとこたちの みこと こ
国之常立神に命を請ひき。ここに天つ神の命をもちて、太占に卜相ひて、詔りたまひ

しく、「元、日御子ら、善く大八州を治ろしめさんも、四海乱るるにおよびて

やそまがつかみ
八十禍津神、八はしらの雷神、共に良より来る。」とのりたまひき。天照大御神、

併せて卜相ひて、詔りたまひしく「日御子、玉の音をもちて災を鎮むべし、玉の

音は猛き壮士神二柱にて守護られん。」…わかるか。

兵二人 わからん。

女 八十八の邪神が東北から来る。天皇は二人の男が護る玉音にてこれを鎮めよとい

う意味よ。

兵1

ほう。

女 ちなみに八十八とは米を表す。米の邪神、つまり米国のことじゃ。ほら、八十八歳の

お祝いを米寿とか言うじやろ…。

兵1

ああ、知ってる知ってる。

女 そして2人の男とはお前達に他ならぬ。お前様たちよ。

兵1

ああ、そうかい。

女 ゆけ！それ持って行け！世界を救ええ！

兵1

へいへい。

女 お前、本気にしとらんだろ。

兵2

雑仕殿。

女

其の名で呼ぶなあ。今、私はくにのとこたちの国之常立神のげしよ下生、雑仕などと呼ぶやつは…。

兵2

玉音盤、確かに受け取った。

女

…。

兵2

主殿のことは…他言せぬ。安心しなさい。

女 …四方の海、みなはらからと思う世に。

兵2 …。

女 など波風のたちさわぐらん。(僅かに笑う)

女、気絶する。

兵1 あ。

兵2 みな同胞か。(兵2、金庫を拾い上げる)
はらから

兵1 …あれだけ渡したがらなかったものを…どういうことだ。

兵2 これが玉音盤だった場合、主の女官に危害が及ぶのを恐れたんだ。そうでしょ？

兵2、女に呼びかけるが女、動かない。

兵1 …気絶してるんじゃないのか？

兵2 狸寝入りだ。

兵1 狸寝入り？では、この神懸りは偽り……。

兵2 ああ。俺はそう見ている。

兵1 ……金庫一つ渡すのに面倒なことをするものよな。

兵2 神懸かつて渡したということだったら主にも言い訳が立つんだろ。なにせ聖師様のこ
意思だからな。

兵1 はは、教祖をハッタリのダシに使うとは。こやつ信仰も大したことないのう。

兵2 ただただ主を想う一念が信仰心を上回ったといったところか。

兵1 では、叩き起こして憲兵に。

兵2 主のことは秘すると約束した。こいつ（金庫）に免じて寝かせておいてやつてくれぬか。
しかし、このような邪教を残しては後々の禍根に……。

兵2 四方の海、みなはらからと思う世に、など波風のたちさわぐらん。

兵1 明治大帝の御製だな。

兵2 人類はみな友人、四海同胞か……今聞けば空々しいが。

兵1 ああ。

兵2 この人は我々を同胞と恃み、譲った。譲歩には譲歩で応えたい。……軍であれ邪教で
あれ、共に奉ずるものをかけての……ギリギリの選択だったのだから。

兵1 …ふん、まあよかろう。

兵2 感謝する。

兵1 しかし…それを、どうする。

兵2 元あつた部屋に戻す。

兵1 …。

兵2 止めんのか？

兵1 勝手にしろ。

兵2 …そうか。

兵1 行け、撤収命令が出る前にな。

兵2 お前は どうする。

兵1 死ぬ。

兵2 …うむ。

兵1 …全陸軍がこの師団決起に応ずれば、共に米兵と戦う。そして死ぬ。反対に陸軍が鎮圧しに来るなら…自決する。よって死ぬ。

兵2 …そうか。

兵1 貴様の立てた対米独立案、無駄にする。済まん。

兵2 気にするな。…あと、俺は生きる。

兵1 …うむ。

兵2 消えていく大日本帝国を弔いながらな…生きて、死ぬ。

兵1 そうか。

兵2 介添え、させろ。

兵1 よかろう。仕損じるな。

兵2 貴様のナマクラよりは確実だ。(腰にさした銃を叩く)

兵二人、笑う。

兵2 往くか。

兵1 ああ。

二人、軍歌を歌い、笑いながら去る。女、一人残される、ややしてゆつくりと立ち上がる。

女

我深く世界の^{たいせい}大勢と帝國の現状とに鑑^{かんが}み、茲^{こゝ}に忠良なる爾^{なんじ}臣民に告ぐ。傾斜空
間第六回公演はこれにて終了いたします。本公演は、実在の人物・団体とは一切関係
ございません。ございませぬが、終戦直前に近衛師団が皇居を占拠したり、大正期か
ら宮中女官の間に新興宗教が流行つたのは本当です。では、本日はどうもありがとうございました！

完